

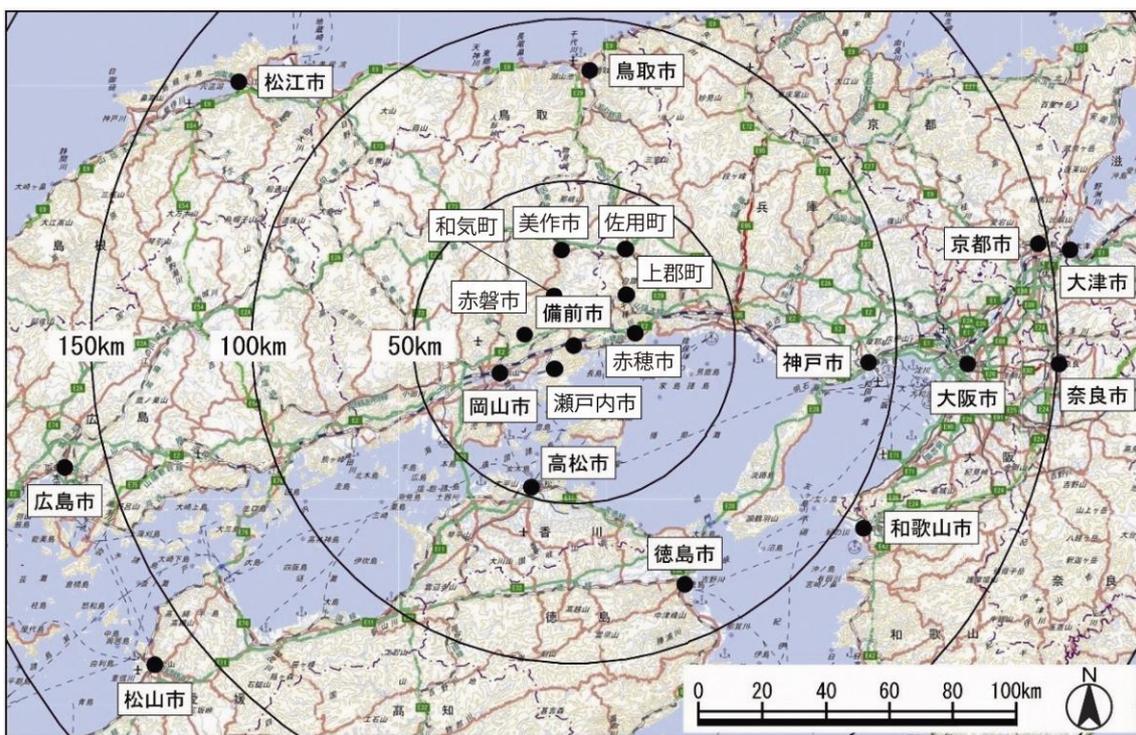
第1章 備前市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置・地名

本市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置しており、北緯 34 度 44 分、東経 134 度 11 分に位置します。行政区は、旧備前市の西鶴山・香登・伊部・片上・伊里・東鶴山・三石地区と旧吉永町の吉永地区、旧日生町の日生地区の 9 地区に分かれています。

市北部、旧吉永町は東に兵庫県佐用郡佐用町、赤穂郡上郡町に接し、北は美作市に接する南北に長い地域です。市域の南東部旧日生町は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に面しています。市域の西部旧備前市は和気町、赤磐市、岡山市、瀬戸内市に接しています。面積は 258.14km²、岡山県の中で約 3.6% を占めています。県庁所在地である岡山市からは、直線距離で約 25 km 離れています。吉永地区、三石地区は J R 山陽本線、香登地区、伊部地区、片上地区、伊里地区、日生地区、寒河地区は J R 赤穂線の沿線となっています。



【図 1-1】 備前市の位置

広域位置図(地理院地図を基に作成)

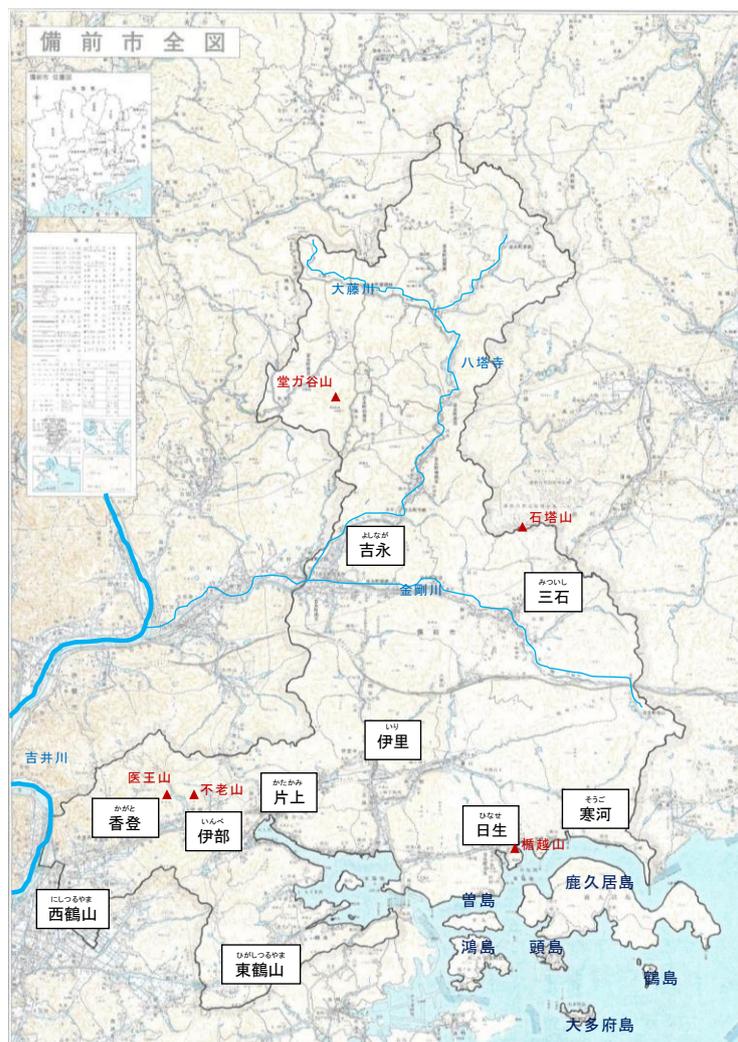
(2) 地勢

岡山県の南東部に位置する備前市は、中部に片上湾を擁し、西端には、岡山県三大河川の 1 つ吉井川が流れています。備前市の地形は、階段状に降下する山々が直接海に至る典型的な沈降海岸で、総面積の約 80% を山林が占めています。

岡山県の東南端に位置する日生町は、山地が海にせまり平地が少ない本土と瀬戸内海に浮かぶ大小 13 の日生諸島からなっています。主に岡山下最大の島である鹿久居島、日生諸島で最も人口が多い頭島、江戸時代に水上交通の要所として在番が設けられた大多府島、キリシタン流罪地の鶴島、別荘地として栄えた鴻島などが展開しています。

岡山県の東南部に位置する吉永町は、四方を山で囲まれており、町の中央部を北から南へ流れる八塔寺川、南部を東から流れる金剛川にそって帯状に平地が開けています。

備前市の西部、香登地区にしつるやまから西鶴山地区にかけては吉井川左岸に当たり沖積平野の平坦地が広がり、伊部地区から三石地区にかけては急峻な山並みが続き、平坦地が谷に沿って細長く開けています。これは埋積谷まいせきこくとよばれる地形で、後氷期こうひょうきの海面上昇によって瀬戸内海に入り込んだ海水によって谷が沈水ちんすいし、おぼれ谷になるのに対し、海水の侵入が緩やかで、堆積作用たいせきさようが優勢である場合に形成される地形です。片上大橋がかかる片上湾はおぼれ谷の典型で、その縁辺部の東鶴山地区、伊部地区、片上地区、伊里地区などに埋積谷の細長い平坦地が形成されています。



【図 1-2】 備前市地区別全区

(3) 市の変遷

備前市は、「平成の大合併」により、平成 17(2005)年 3 月 23 日に旧備前市、旧日生町、旧吉永町が合併し、新「備前市」として誕生しました。また、前述の 1 市 2 町は「昭和の大合併」で誕生しています。

時期	行政区域															
M22~S26	伊部町	片上町	(旧伊里村)	伊里町	香登町	鶴山村	和气郡	鶴山村	邑久郡	三石町	日生町	福河村	(旧英保村)	吉永町	神根村	三国村
S26~S30	備前町															
S30~S46	備前町										日生町	吉永町				
S46~H17	備前市										日生町	吉永町				
H17~	備前市															

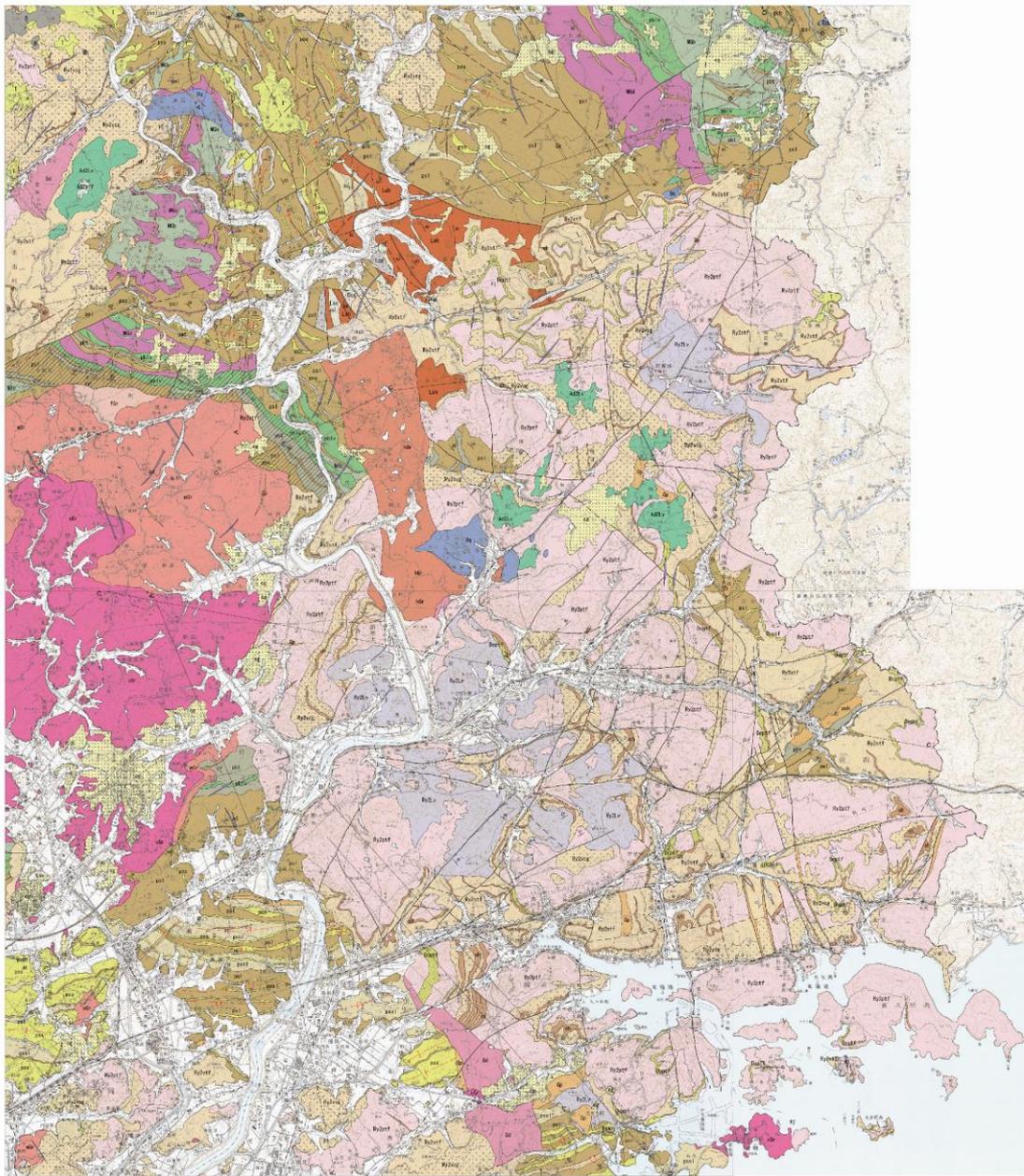
【図 1-3】 備前市の変遷

(4) 地質

市域は、ほとんどが中生代の流紋岩類からなりますが、三石地区、西鶴山地区(畠田)^{はたけだ}周辺などには中生代以前の泥質岩などが、吉永地区の和意谷^{わいだに}、堂ガ谷山などには中生代の安山岩類が小面積に分布しています。また、主な河川の流域及び湾に面した狭い平野部には沖積層が分布しています。

備前焼の産地である伊部地区は、山間低地の粘土質層、シルト質層および砂礫層が、西鶴山地区には吉井川沿いに堆積した砂礫層などが堆積しています。山間低地あるいは山麓に堆積している沖積層の厚さは比較的薄く、数m以内であると言われています。この沖積堆積物の一部が備前焼の原料粘土として古くから採掘されてきました。

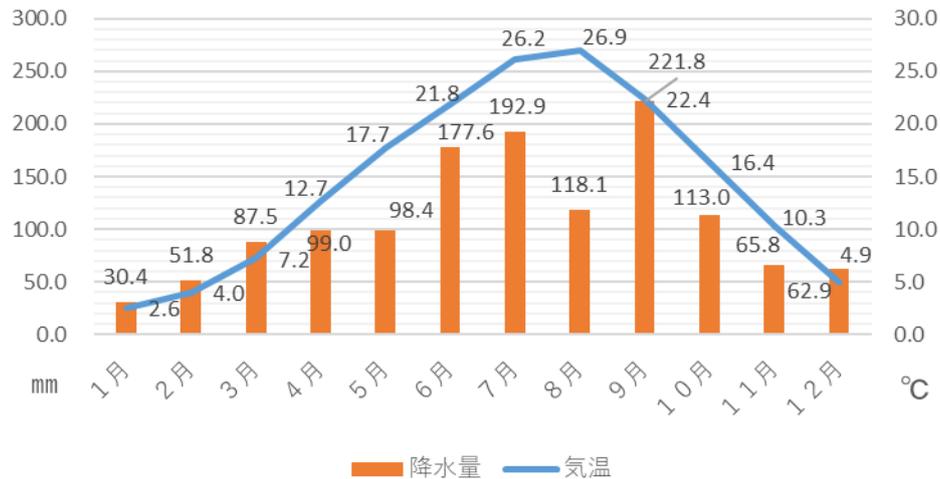
出典：備前市植物目録、神谷雅晴、須藤定久「備前焼とその粘土」地質ニュース 609 号



【図 1-4】 備前市の表層地質 出典：西武技術コンサルタント株式会社ホームページ「岡山県地質図」より

(5) 気象

気候は瀬戸内式気候に属し、平成20(2008)年から平成30(2018)年の年平均気温14.7℃、年間降水量1,383.0mmとなっています。これは温帯で晴天が多く、典型的な瀬戸内式の気候です。昭和49(1974)年、昭和51(1976)年、平成2(1990)年には台風による豪雨で甚大な被害を受けました。



【図1-5】過去10年間(H21～H30)平均気温・降水量の推移

出典 和気地域気象観測所のデータによる(岡山地方気象台)

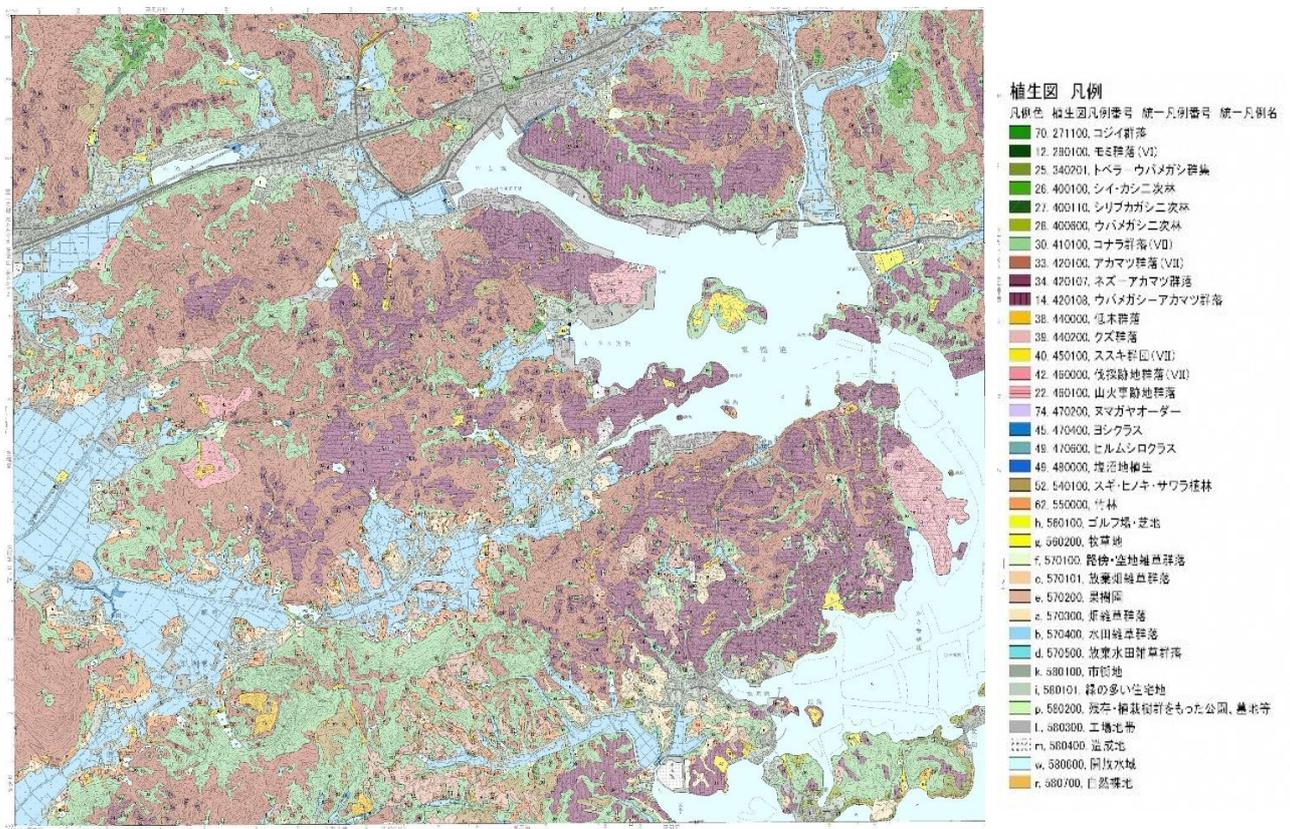
(6) 動物

最近では全国的にニホンジカが分布を広げ、岡山県でも県域東部の広い範囲に見られるようになって、備前市内でも個体数が増加しています。日生海岸・日生諸島は旅鳥の探鳥地として知られ、カモ類、シギ類、カモメ類、イソヒヨドリ、オオジュリンなどが見られます。市域北部の吉永地区(加賀美・多麻)ではモリアオガエルの生息が確認され、繁殖期には泡で包まれた卵塊を樹上で見ることができます。昆虫類では鹿久居島が暖地性の種が多い島として知られています。吉永地区(多麻)の滝谷神社社叢ではヒメボタルの発生が知られています。

(7) 植物

沖積平野の平坦地は市街地や造成地、水田、畑地などとして利用されています。河川沿いには狭いながらもヨシやマコモなどからなる河辺植生があり、河口部にはウラギク、シ

バナ、ハママツナなどの塩生植物が生える干潟がわずかに見られます。海岸線は複雑に入り組み、砂浜やれき浜、磯浜などがありますが、市街地付近ではほとんど自然海岸は残されていません。砂浜に生えるハマナツメは岡山県内ではほぼ備前市でしか生育が確認されていません。伊部地区や三石地区、伊里地区(閑谷)のため池には、サンショウモ、サイコクヌカボ、チョウジソウなどの絶滅危惧種が生育していることがあります。伊里地区にある旧閑谷学校の周辺地域や伊部・三石地区の市街地背後の丘陵地、吉永地区(八塔寺)など、丘陵地の多くはアカマツ林であるが、松枯れなどによって次第にアベマキ、コナラを主体とした夏緑広葉二次林に遷移しつつあります。また、近年では減少傾向ですがコバノミツバツツジも低丘陵部に群生が見られます。東鶴山地区、鹿久居島などには丘陵地の一部に湿地があり、モウセンゴケ類やミミカキグサ類などの食虫植物が見られます。香登地区の福生寺周辺や吉永地区(加賀美)の日吉神社周辺、伊部地区(久々井)の八幡宮周辺、伊里地区(麻宇那)の石立神社周辺などでは潜在自然植生と考えられるシイノキやカシ類を優占種とする常緑広葉樹林が残存しています。日生諸島や日生地区の高良八幡宮周辺のように、島嶼部や本土側の海に面した急崖地ではウバメガシが優占する海岸林が見られます。丘陵地の一部にはスギ、ヒノキの植林地や竹林が見られる場所もあります。出典：備前市植物目録



【図 1-6】 備前市の植生

出典：「自然環境調査 Web-GIS 1/25,000 植生図(片上)」(環境省生物多様性センター)

(8) 景観

①沿岸地域の景観

瀬戸内海に面して、古くから漁業と海運業で栄えた日生地区は、大小の島々からなる日生諸島があり、豊かな自然と多島美が広がります。現在も日生港には魚介類が水揚げされているほか、昭和36(1961)年頃からカキ養殖が盛んで、海に浮かぶカキ筏は、この地域の特徴ある景観をつくりだしています。



日生港

日生地区は階段状に降下する山々が直接海に至る典型的な沈降海岸の地形で、平地は僅かですが、沿岸に面して家並みが形成されています。

日生地区と市街地である片上地区を結ぶ伊里地区は、東部に岡山藩による新田開発によって造成された「井田」^{せいでん}が、現在も水田として地域住民によって守り伝えられています。市西部は大正時代から耐火煉瓦会社^{れんが}が操業を続けており、立ち並ぶ煙突群は独特の景観を形成しています。



片上市街地の耐火物工場

日生の島しょ部の西側、瀬戸内海が深く入り込む片上湾は、市役所がある片上地区が湾の最深部にあたり、奈良時代から現代まで港として発展した地域です。

②市街地域の景観

片上地区は、近世山陽道沿いの宿場町として繁栄してきました。大正12(1923)年から平成3(1991)年までは、硫化鉄鉱を主に運搬する片上鉄道の終着点としても栄えていきました。現代では、市街地が広がっています。



伊部の町並み

片上地区の西側に位置する伊部地区は、北を中心に中世から脈々と窯の築かれた山が広がり、南側も山が立地する盆地のような地形で、西側には大ヶ池が横たわっています。平野部には明治時代に直立の煙突をもつ個人窯がつくられはじめ、現在の窯業地の景観が形成されていきます。現在では窯元や作家が軒をつらね、煙突から立ち上がる煙は、伊部地区を訪れる多くの備前焼愛好者や観光客を楽しませています。市東部の三石地区は、山々を取り囲む盆地に市街地が形成され、全国的にみても古くから耐火煉瓦産業が盛んで、多くの採石場や耐火煉瓦工場が現在も立ち並び明治時代の面影を今も残しています。また、採石場である台山は年々その姿を小さくしています。市西部の香登地区は、西に吉井川が流れており、新幹線の路線とほぼ並走している旧山陽道に沿って、宿場町の様相を垣間見ることができる商家跡が立ち並んでいます。

③中山間地域の景観

備前市内においても最大の山林を有する吉永地区は、八塔寺川と金剛川が合流する和気町と隣接した地域を中心としており、西に和気町、東に三石地区と山合に形成されています。東西を山陽本線が結び、沿線にある吉永地区ふくみつにあるたくらうしがみしゃ田倉牛神社には正月5日に大勢の参拝客で賑わいます。標高400



吉永の中山間地域

mの高原に位置する吉永地区の八塔寺は、約1,200年前、道鏡が開基したと伝わる山岳信仰の古刹で、「西の高野山」とも称された場所です。八塔寺を中心に開けたといわれる地域であり、現在でも茅葺き民家や寺院が日本古来の農村景観を伝えていることから、「八塔寺ふるさと村」として映画やドラマのロケ地としても使用されています。また、市内には多くのため池が見られ、特に東鶴山地区ではたくさんのため池が地域の景観を作っています。

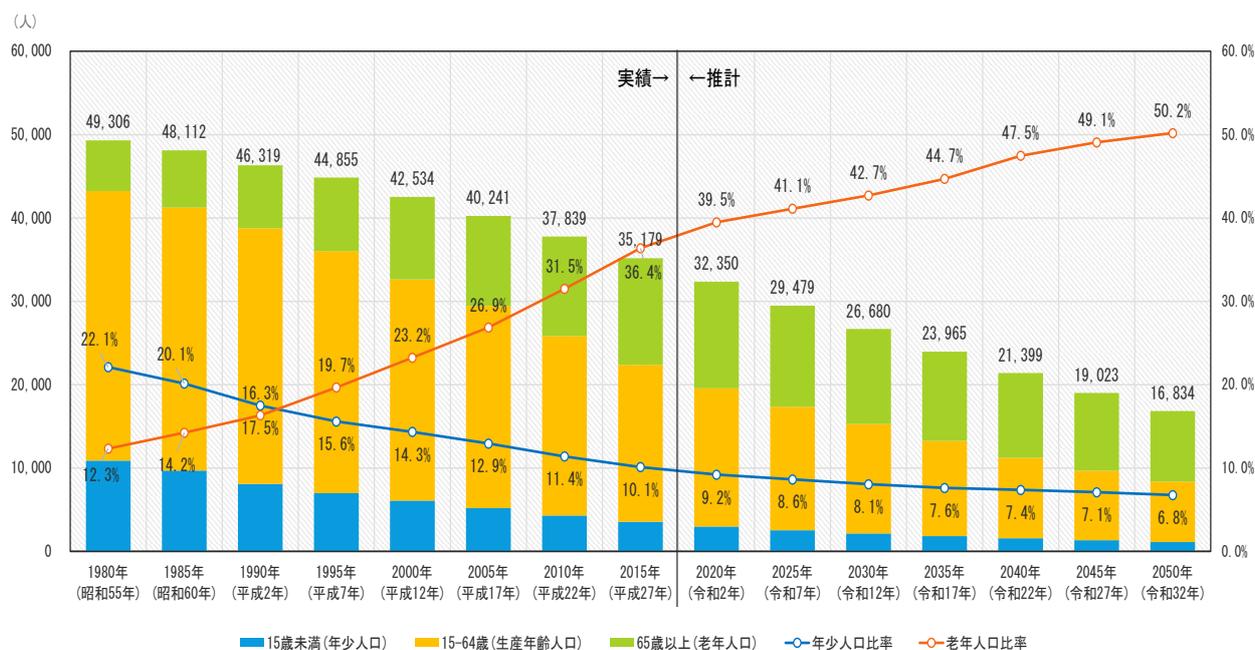
2 社会的状況

(1) 人口

備前市の人口は昭和 50(1975)年をピークに減少し続けています。年齢別の人口の推移は、15 歳未満の年少人口及び 15～64 歳の生産年齢人口が減少する一方で、65 歳以上の老年人口は増加しています。

人口動態の推移については、自然動態は、死亡数が出生数を年平均約 300 人うまわっています。また社会動態は、転出数が転入数を年平均約 200 人うまわっています。特に 20 歳から 30 歳代の転出が多く、進学や就職のタイミングだけでなく、子育て世代の転出が多くなっています。

将来、推定人口は令和 12(2030)年には 26,680 人、令和 32(2050)年には 16,834 人と大きく減少する見込みとなっています。特に日生諸島や吉永地区北部の山間部の地域の人口は、他の地域の人口よりも減少していくことが予測されている厳しい状況です。



【図 1-7】 備前市の人口の推移

出典 実績値:国勢調査、推計値:国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」

【表 1-1】 地区別人口の見通し

No	地区	人口		
		平成 27 (2015) 年	令和 27 (2045) 年	減少率
1	西鶴山	1,389 人	818 人	41.1%
2	香登	2,568 人	1,629 人	36.6%
3	伊部	6,344 人	3,678 人	42.0%
4	片上	3,566 人	1,809 人	49.3%
5	伊里	5,769 人	2,989 人	48.2%
6	東鶴山	1,532 人	711 人	53.6%
7	三石	2,550 人	1,181 人	53.7%
8	日生	3,925 人	2,047 人	47.8%
9	寒河	2,571 人	1,545 人	39.9%
10	諸島部	438 人	139 人	68.3%
11	吉永	3,583 人	2,052 人	42.7%
12	神根	717 人	330 人	54.0%
13	三国	227 人	95 人	58.1%
—	合計	35,279 人	19,023 人	45.9%

出典：2015 国勢調査結果／2045 人口メッシュデータより推計

*備前市の地域区分では、10 は 8・9 へ、12・13 は 11 へ含まれます

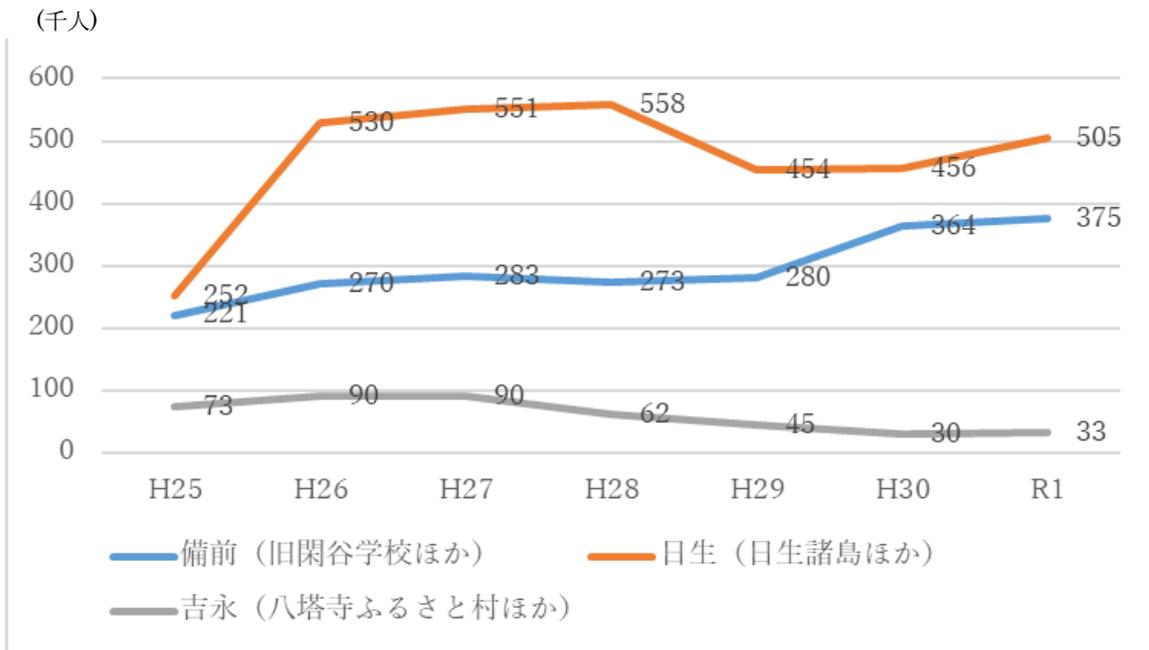
(2) 産業

商工業は、耐火物製造業を中心に精密機械、化学、医薬品、鉄鋼、運輸など多様な業種が進出しています。また、近年、大型商業施設の進出も見られます。

農業については稲作中心に営まれており、一部地域でモモ、ブドウ、イチジク、ミカンなどの果樹栽培が見られます。

水産業については、カキ養殖業を中心とした漁業が盛んに行われています。また、市内に 2 箇所ある魚市場は、観光地としても知られています。

観光については、瀬戸内海国立公園をはじめとする風光明媚な景観や、日本遺産である特別史跡旧閑谷学校や、日本有数の窯業地で本市の特産である備前焼の産地として文化資源を有し、さらには山海の豊富な幸など、資源に恵まれています。



【図 1-8】 観光地の観光客数

出典：令和 2 年度岡山県観光客動態調査報告書

(3) 交通

今日の備前市内の公共交通機関として、鉄道、市営・民間バス、定期船が挙げられます。

JR 西日本山陽本線には三石駅、吉永駅があり、JR 赤穂線には寒河駅、日生駅、伊里駅、備前片上駅、西片上駅、伊部駅、香登駅と多数の駅があり、各駅が市民の生活基盤となっています。

備前市内を市営バスと民間路線バス等が運行しています。令和 2(2020)年 3 月時点、市内の路線は、市営バスが日生線、三石線、東鶴山線、福石線、吉永線、八塔寺線、南北閑谷学校のぞみ線、三国和意谷線、寒河蕃山伊里線、頭島線となっており、東西南北の主要道路を結んでいます。また市外からは、片上から岡山駅までを宇野バスが、吉永病院からイオン赤穂店を東備西播定住自立圏域バスが、和気駅から片上及び吉永病院までを和気町営バスが、瀬戸内市営バスは長船駅から備前市新庄を經由し瀬戸内市長船町東須恵の美和をつなぎ、それぞれ運行しています。

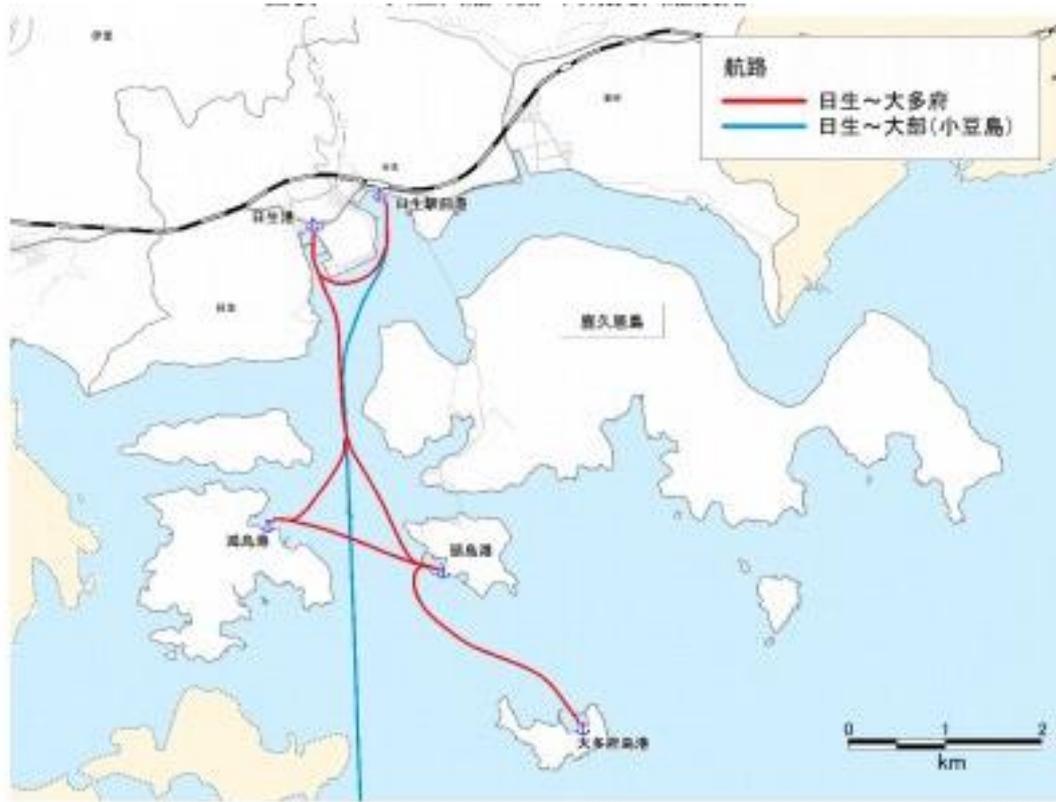
主要幹線道路は国道 2 号、250 号、374 号、484 号のほか、岡山ブルーラインから山陽自動車道備前 IC へのアクセスも良いため、多くの自動車が利用しています。

また、日生諸島と本土を結ぶ定期船は、1 社の汽船会社が運行しており、鴻島・頭島・大多府島と本土を結ぶ重要な交通手段となっています。他にも香川県の港である小豆島とも航路を結んでいます。



【図 1-9】 路線バスの運行状況

出典：備前市地域公共交通網形成計画

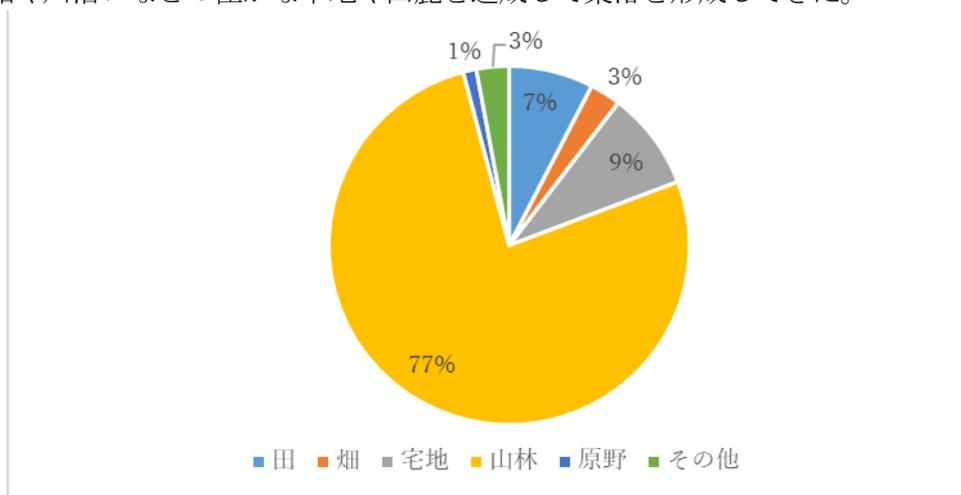


【図 1-10】 大生汽船・瀬戸内観光汽船航路

出典：備前市地域公共交通網形成計画

(4) 土地利用

備前市の総面積は 258.14 km²で、平成 27(2015)年 10 月の統計以降変化していません。地域の約 80%が山地で構成されており、宅地は約 9%で、一定の広さをもつ平地に乏しいが、山裾や川沿いなどの僅かな平地や山麓を造成して集落を形成してきた。



【図 1-11】 令和 2 年度地目別民有地面積

出典：備前市の統計

3 備前市内の文化施設

【表 1-2】 備前市内の文化施設等一覧（令和3年4月1日現在）

名称	特徴	収藏品	住所	備考
備前市歴史民俗資料館	発掘された資料や古備前などを展覧し備前焼の歴史を紹介するほか、正宗白鳥、柴田錬三郎、藤原審爾、小手毬るい、末井昭など備前市ゆかりの小説家等の作品を展示。	備前地域の古文書、歴史資料、民俗資料等数万点を収蔵。	東片上385	平成3(1991)年開館 (昭和26年竣工の建物)
備前市加子浦歴史文化館	温故知新を基本に海と人を活かす町をテーマに生活や産業の歴史を展示。	日生地域の古文書、歴史資料、漁具を特徴とする民俗資料等数万点を収蔵。	日生町日生801-4	平成9(1997)年開館 (江戸時代末の建築の建物を利用)
備前市吉永美術館	吉永地域の歴史文化を紹介する施設。	江戸時代に生きた郷土出身の漢学者でもあり書家でもある武元登々庵とその弟君立の作品を収蔵。制札など含めて数千点を収蔵。	吉永町吉永中885	平成2(1990)年開館
備前市埋蔵文化財管理センター	埋蔵文化財の保存・活用を図るための施設。発掘調査、出土品の適切な保存管理、調査研究、活用公開などを通して、埋蔵文化財を地域の資産として後世に引きつぐ。	備前市域内の遺跡等で出土した埋蔵文化財数万点を収蔵。	伊部974-3	平成23(2011)年開館 (昭和46年設置の岡山県工業技術センター備前陶芸センター本館の無償譲渡)
備前市立備前焼ミュージアム	800有余年歴史がある備前焼の歴史を古備前、江戸時代の資料、近現代の作家作品を通して展覧する。	古備前から現代に至る作品及び資料と、備前焼関連の資料数千点を収蔵。	備前市伊部1659-6	平成27(2015)年開館 岡山県備前陶芸美術館を備前市に無償譲渡
FAN美術館	備前焼の人間国宝 藤原啓記念館、アートオリンピアの受賞作品、人間国宝美術館の3つのアートプロジェクトが集合。	重要無形文化財保持者(人間国宝)藤原啓の作品をはじめ備前焼作品を数千点を収蔵。	穂浪3868	平成29(2017)年開館
BIZEN中南米美術館	日本唯一の古代中南米美術館。世界の七大文明中、日本の歴史教育の空白にある三大(メキシコ中央高原、マヤ、中央アンデス)文明と周辺文化を紹介。	古代中南米美術品数千点を収蔵。	日生町日生241-10	昭和50(1975)年開館

* 岡山県内76美術館・博物館等の案内ガイド「おかやま博物館めぐりの旅」をもとに作成

* このほか岡山県博物館協議会加盟の施設ではないが関連する施設として、正宗文庫、柴田錬三郎生家、八塔寺ふるさと村民俗資料館などがある。



備前市吉永美術館



BIZEN 中南米美術館



備前市歴史民俗資料館



備前市加子浦歴史文化館



備前市埋蔵文化財管理センター



備前市備前焼ミュージアム



FAN 美術館

【図 1-12】 備前市文化施設位置図

4 備前市の歴史

(1) 先史(縄文時代・弥生時代・古墳時代)

今から 4,000 年前の縄文時代中期末、片上の地に竪穴式住居数棟からなる集落が形成されます。^{ながなわていせき}長縄手遺跡と呼ばれ、研究上重要な遺跡のひとつとなっています。岡山県の南部は、弥生・古墳時代を通じて多くの集落跡や巨大古墳があります。備前市はその南東端、岡山県三大河川の吉井川左岸にあたります。備前市の西半分は、船山遺跡の弥生時代の集落や円墳としては県内第 3 位の規模を誇る丸山古墳などの遺跡が多く所在します。一方東半分は急峻な山並みが連続し、三石にかけての県境は、弥生・古墳期の遺跡が非常に希薄な地域です。逆にその交通のさまたげともなる地形が、政治・交易などの面で一定の範囲に文化圏が集約しやすいという地域の特徴を生み出しました。

(2) 古代(奈良時代・平安時代)

奈良時代、兵庫県境に近い三石には古代山陽道の^{さかなが うまや}坂長の馬屋が設けられます。一方、備前国の東部、標高 400m を超える山並みが連続する熊山山塊では、^{かいだん}戒壇と呼ばれる石積みの^{いしづみきだんぐん}仏塔を中心に石積基壇群が形成されていきます。その後、熊山の南麓には渡来系氏族^{はたし}秦氏がかかわったと言われる^{かがと}香登寺が造営されました。

現在、備前市役所が置かれている片上の地は当初^{おくのごう}邑久郷に属していました。天平神護 2(766)年に^{ふじのごう}藤野郷(のちの和気郡)に編入されますが、入り組んだ湾の最深部に美作国の津が設けられ、重要な役割をはたしました。その後、片上の地は山陽道が北回りの和気を経由するルートから、南回りの片上・福岡に変わったことで、交通の要衝として発展していきます。

(3) 備前焼の歴史(平安時代末頃～現代)

備前焼は、7 世紀頃より瀬戸内市内の^{おくこようせきぐん}邑久古窯跡群で連綿とつくられていた須恵器の生産が終わる平安時代後期、それに呼応するかのよう^{おくこ}に伊部地区を中心に生産が開始されるやきものです。中世後半、播鉢・壺・甕などの堅牢さが多くの需要を生み、さらには^{しよくほうき}織豊期、焼締による素朴で簡素な風合いが多くの茶人に好まれました。釉薬を使わないことによつて器表に表れるさまざまな窯変は、現在まで多くの愛好家を生んでいます。

備前焼が成立した背景を以下にまとめます。備前市域の約80%は山地です。その地質は流紋岩類です。岡山県南に展開する花崗岩地域にくらべて、流紋岩地域は、樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発生する傾向にあります。この流紋岩から生成さ



伊部南大窯跡の物原

れる山土やそれが堆積した田土が備前焼の原料として使用され、アカマツが燃料として消費されました。急峻な山並が続く熊山山塊は、南面する伊部の地と共に、窯業史を飾ることとなる備前焼を生み出した母体となります。

(4) 中世（鎌倉時代・室町時代・戦国時代）

熊山戒壇の地に建立された^{りょうせんじ}霊山寺は、この地域に成立した^{かがとのしょう}香登荘の動きと連動しながら、備前焼生産の後ろ盾となります。このことは、須恵器生産が律令国家を中心にした流通経済の中でおこなわれていましたが、平安時代後半になると地域色が強くなっていくことと呼応しています。南北朝時代には、播磨の国境近くにある三石城の覇権をめぐって足利氏と新田氏の間で激闘があり、その兵火を受けた霊山寺は滅失してしまいます。

室町時代には、備前の地は、赤松氏、山名氏、戦国時代には浦上氏、宇喜多氏などが覇権を争う舞台ともなりました。播磨、美作に接する備前国の東端という地勢は、三石城、富田松山城など中世城館が18箇所も所在する地域となり、市域の北端、「西の高野山」と呼ばれた^{はつとうじ}八塔寺は鎌倉・室町時代を通じて長く戦いの場となりました。

(5) 近世（江戸時代）

備前国の東端という場所は、藩の中心があった現在の岡山市から遠く、人口が希薄で、自然豊かです。江戸時代、その環境を的確に把握して藩を運営したのが池田家です。^{ぐんだいつだえいちゆう}郡代津田永忠に命じて、「^{さんすいかんせい}山水閑静にして^{よろ}宜しく^{どくしょこうがく}読書講学すべき地」にふさわしい地に作ったのが閑谷学校であり、池田が治めた播磨・伯耆を見渡せる



井田碑

「土地の光潤、草木の茂盛」の場所に作ったのが岡山藩主池田家墓所です。施設維持の経営基盤も学校や墓所周辺の林や田からの収益をあてました。閑谷学校には近世山陽道を往来する多くの文人墨客が訪れました。さらには備前市東半にみられるおぼれ谷の地形をうまく利用してつくった干拓地が井田(103.84 ha)です。これは中国周時代にあったとされる統治機構を地上に再現したもので長方形の区画が九等分された「上井」と正方形の区画が九等分された「下井」からなります。

日生の島嶼部でも、1,000ha に及ぶ鹿久居島は藩主の狩猟場・処刑場に、風待ちとして大多府島には巨大な防波堤を築き、港湾施設を整備、島嶼群から少し離れた鶴島は明治初年浦上キリシタン117名の配流の地となりました。

播磨との国境、難所といわれた船坂峠から、三石、伊里、片上、香登を通り、吉井川の渡しに至る近世山陽道は、三石・片上には本陣・脇本陣が置かれ、一里塚が整備されました。片上では本陣が備前藩主の指定宿になり、藩の米蔵も置かれ大坂方面への年貢米の回漕で商業が盛んになる在町として栄えました。香登では間宿ですが、運送業や醸造業で栄え、お歯黒は高級品として全国的に知られていました。

(6) 近代 (明治時代・大正時代・昭和20年まで)

ろう石は江戸時代中頃、三石地区で発見され仏像の製作などに原料として用いられ、明治には石筆の原料として大量に生産されました。その後、耐火特性が判明したろう石を原料に用いた耐火煉瓦の製造がはじまり、19世紀末に製造が始まって以降、産業として急激に成長しました。戦後は鉄鋼業の炉材として膨大な量の耐火煉瓦が生産されました。生産量の増加に合わせて、移出の便から工場も片上・伊里地区の臨海部に移動しました。この産業は現在でも備前市の基幹産業のひとつであり、三石・吉永・日生・片上・伊里地区の人々の生活や、政治・経済など地域の変遷に大きく関わってきました。文化の面では、与謝野晶子・鉄幹をはじめ著名な文学者が備前を訪れ、地元の人々と交流しました。

(7) 現代 (昭和20年以降)

江戸時代、日生地区は岡山藩の参勤交代のための労役等の義務が課される加子浦になる一方、日生沖合の海の使用に関して強い権限を持つようになり急速に発展しました。特に



日生諸島

漁業では様々な網漁法が用いられ、なかでも日生で生み出された「つぼ網」と呼ばれる定置網は各地に広がりました。明治20(1887)年ごろから始まった朝鮮海峡への出漁は、明治40年代には韓国東南岸に定住者によって村落まで形成されました。現在は、昭和36(1961)年に始まったカキ養殖が盛んで、カキオコ(ガキ入お好み焼き)がB級グルメとして全国的に知られています。

また、交流人口の多かった備前市の沿岸部は柴田錬三郎や藤原審爾といった直木賞作家をはじめ多数の文学者を輩出した地域として知られています。



藤原審爾文学碑